

かめのり大学院留学アジア奨学生

## 月次報告レポート

(2017年8月)

### ・研究について

「源平盛衰記」巻第二十五「行<sub>ニ</sub>御齋会<sub>ニ</sub> 新院崩御」には以下の本文が見られる。

凡此君幼稚ノ御時ヨリ賢聖ノ名ヲ揚、仁徳ノ行ヲ施ス。御情深御事共多カリケル中ニ、去嘉応・承安ノ比、御在位ノ始ナリシカバ、御年十歳バカリニヤ、紅葉を愛セサセ給ケルガ、紅葉ハ秋ノ物也、秋ハ西ヨリ来ルトテ、西門ノ南脇ニ小山ヲ筑カセ、紅葉ヲ立植テ愛セサセ給ケルニ、仁和寺ノ守覚法親王ヨリ、櫛ト鶏冠ノモミヂノ色ウツクシキヲ二本進覧アリ。

頭注には、下線部の典故について、岑参の「与<sub>ニ</sub>高適薛勣<sub>ニ</sub>同登<sub>ニ</sub>慈恩寺浮图<sub>ニ</sub>」の中の「秋色従<sub>レ</sub>西来」を挙げる。岑参は(七一五頃～七七〇)唐代盛期の詩人。戦場を往来し、辺境・砂漠の遠征や別離の情をうたった詩が著名で、高適・王昌齡・王之涣らと共に辺塞詩人として名がある。詩集「岑嘉州詩集」がある。今まであまり論じてなかった『平家物語』における岑参の受容の可能性を探りたいと思う。

例えば延慶本の巻十四「成親卿ノ北方ノ立忍給事」にこのような一文が見られる。

日ノ晩行影ヲ見給ニ付テモ、大納言ノ露ノ命、コヨヒヲカギルナリト思遣レテ消入心地ゾセラレケル。女房、侍共モカチハダシニテ、恥ヲモ不知迷出ニケリ。家中ノ見苦キ物ヲ取シタ、ムルニモ不及。門ハ扉ヲ開トモ、押立ル又者モナシ。馬ハ馬厩ニ立レドモ、草飼ナヅル人モナシ。夜アクレバ車馬門ニ立テ、賓客座ニ列レリ。遊ビ戯レ舞ヒ踊リ、世ヲ世トモ思ハズ。近隣ノ人ハ物ヲダニモ高クイハズ、門前ヲスグル者モ怖恐レテコソ、昨日マデモ有ツルニ、夜ノ間ニ替行有様、盛者必衰ノ理リ、眼ノ前ニコソ顯レケレ。

下線部は岑参の「東歸留題太常徐卿草堂」という詩の下句の「車馬日盈門、賓客常滿堂」と近似している。